

たより

『美紗の会』 ニュース

第40号

平成十四年八月五日

発行者
「美紗の会」
03-3441-2726
編集責任者
大久保 朋子



西松布 咏

佐渡からフアドへ

六月半ば「情熱のスペイン悠久のポルトガル」と銘うった十日間のツアーに参加した。三味線を置いての身軽な旅など思いもよらなかったが、「悠久のポルトガル」の文字が、私の心をかき立てた。以前からフアドは、気になる音楽だった。わけてもアマリア・ロドリゲスの唄う「暗い」は、黄昏の海に沈む夕陽のように、深く染めており、その想いを胸に旅立てた。六月のスペインは太陽の溢れる大地に、さまざま表情を見せてくれた。フランクフルトから三時間の飛行で降り立ったバルセロナでは、ガウディのサグradaファミリア。百二十年かけて建築された今でも、あちこち修復し、二百年後によりよく完成の予定といういかにやスベインらしい悠長な話に感動！バレンシアへの車窓からどう一面オリブ畑をぬけてぶどうの畑に囲まれたレストランでのワインと透明なレストランの美味しかったこと。マドリッドでは、ドンキホーテ、サンチョパンサの像の前で記念撮影。プラド美術館で、エルグレコ、ゴヤ、ベラスケスの名画を。裸のマハも前日ワシントンから帰って観ることが出来ラッキーだった。五日目のグラナダは、イスラム最後の栄華を誇ったアルハンブラ宮殿へ。そしてイスラム文化と西洋文化が交差した古都トレ

ドへ。六日目は、アングラシアのフライパンと言われるコルドバへ。車窓から繰り上げられる黄色いじゅうたんのようなひまわり畑に思わず大歓声！ソフィア・ローレン主演の「ひまわり」のラストロヤンニーとの再会のシーンを想い出す。イスラムにキリスト教文化が混じる不思議な宮殿メスキータでは異文化の融合の妙に嘆息する。こうしてバスで二千キロも走り続けたスペインを後にし七日目は、いよ／＼ポルトガルへ。天下を誇った信長の時代に、天正少年使節団が巡ったエヴォラのサンロケ教会へ行く。彼らはパイプオルガンでどんなメロディーを奏でたのだろうか？そしていよ／＼テージョ川を渡り、リスボンへ。街は一七五五年に大地震に見舞われたが、港に近いアルファマ地区は、破滅を逃れる。迷路のような路地は、大航海時代と変わらぬ静かな歴史を刻んでおり、いたるところにアズレージョ（装飾タイル）をほどこした家屋が見られる。時が止まったかのように夕暮れが街を包んだ頃、待ちこがれたフアドを聴きに「アデウガメスキーター」へ。

ワインを飲みながらの食事が終わった頃ギタリーラとヴィオラの男性が暖炉の前に座り、うつつき加減の黒い地味なドレスを着た歌手が、会釈もせず両手を左右に握りしめ、すーっと顎を上げ、静かに唄い始める。まるで地を這うように低く振る声は、しばらくヨーロッパの異文化に圧倒され唄のことなどすっかり忘れていた私の心を揺り動かすように。古い港町リスボンの石畳にフアドが生まれたのは、十九世紀の始め頃だと言われている。昔南ヨーロッパの町々に唄われたセンチメンタルな流行歌や、中南米で育まれたリズム、アクトセントが融け合っ

て独特な節廻しになったと思われ、唄い尻のこぶしの廻し方や、唄い尻のこぶしの廻し方などは三味線と共に唄う浄瑠璃や端唄と似ているような気がした。その内容もサウダーデと言ひ孤独や郷愁に満ちている。船出したまま帰らない夫や恋人への想いの唄や、情熱を胸に秘め、決して男に媚びるこたなく、ひとり強く生きてゆく女の心を描いた唄。それは、じかに触れることが出来ないけれど確かに存在する魂の叫び。それだけに胸がしめつけられるように切なくほろ／＼甘さがたじろぐ。まさに日本の唄の真骨頂である「もの哀れ」"わび・寂び"の目を見せたい。笑顔を見せず身を沈めて唄う姿も、粋と意気地を生きた江戸の女に通じる風情である。そう言えば、三味線は十六世紀中頃にフランススコザビエルが、キリスト教の布教に訪れた頃に伝来し、歌舞伎の黒御簾音楽の莫大(じゅりやん)、着物の襦袢(じゆばん)、京都の先斗町(ばんと)など四百余のポルトガルからの伝来語が今に残っている。きつとフアド

の語源である運命・宿命でつながっていたのだ。ひと月前の五月二十五日、やはり長年の憧れの地であった佐渡に、田中優子先生が中心となり伝統芸能を現代の芸能にと銘うった「友だちとライプツァー」に参加することが出来たのだ。

「秋の夜は長いものとは、まん丸な月見ぬ人の心かも更けて待てども来ぬ人の訪る者は鐘ばかり。数うる指も寝つきつ私し照らされてるわいな」私の大好きな歌沢である。この作者は佐渡に流された罪人のひとりだろうという。月光のさし込む牢内、ひたすら赦免される日を指折り数えて故郷に想いを馳せる切ない唄である。繰り返して唄いながらいつか佐渡に行きたらと願っていた。それがはからずも現実となったのである。西津渡の近くの旅館「吉田屋」の舞台で、古くから伝わる文弥人形の西橋健師と共に浄瑠璃の富本「松風」を上演した。須磨の浦に流された在原平と恋仲になった松風が愛される喜びも東の間。赦免となつて去つてゆく行平の面影を追つて狂つてゆく悲恋の物語。女心の哀しみが、うち寄せる波となつて伝わってくる。フアドもそうである。アマリアの唄うプリマベイヤ。「私達を捕らえた愛のすべては、まるで蠟細工のように崩折れて消えてしまった。あ、不吉な春よ。誰が二人に計つて死ねたか。あの日に揃つて死ねるように。これから先私はひどく苦しめられる。涙と一緒に生きることに。あなたなしで生き続けてゆくことに。」でもやがて哀しみにうちひしがれた後、女は去つていった男の面影を胸に顔を上げて唄い続けてゆく。ユーラシア大陸の最西端に位置するロシアの十字架の塔に「ここに陸果て・海始まる」と十六世紀の詩人ルイス・デ・カモンエスの言葉が刻ま

れている。かたや江戸時代に開発された西廻り航路の千石船が行き交う。繁栄した豊かさの影に数知れぬ男女の出逢いや別れがあつた。たゞらう宿根木の街に続く石畳の果てにも「海は荒波・むこうは佐渡よ」と唄われた大海が拡がると、二つの旅を終えた私の心には「佐渡からフアドへ」と想いの糸が結ばれてゆく。大航海時代から続く悠久の唄が、静かに刻み始めた。遙かに遠かつたアマリアの「暗い」はしげ／＼、白い帆を風に影らませて近づいてくる。最近知つたのだが、アマリアと私の誕生日が同じ七月二十三日。やはり不思議な運命を感じる。

また今お稽古をしている「鳥辺山」という曲は「一人来て、二人連れ立つ極楽の、清水寺の鐘の声遠く聞こゆる三味線は、茶屋の山衆が色酒に、乱れて遊ぶ祇園町」わしはそなたを色里へ沈めておくがいたらししく初御見の、その夜から心に決めて解いた帯今日の旅装、徒然に鴨の流れや寝枕今は名残の鳥辺の山へ鐘もろともに、露と消えゆく」と歌いますが、地歌「鳥辺山心中」を端唄にしたものですが、恥ずかしながら鳥辺山が何処にあるのか知らなかったもので、先日京都へ帰郷したとき高校の同級生たちと西大谷の墓地を通つて清水寺まで鳥辺野を散策しました。清水の舞台から逆に紅葉した鳥辺山を見て死に旅立つ二人の心境がわかるような気がしました。

翌日久しぶりに嵯峨野を散策していたら同級生の女性がこの辺に小督局の墓があつた筈と言ひ出しました。「平家物語の想夫恋の話よ」と言うので思わず口ずさんだ小唄が次の「槍さび(黒田節入り)」です。

「笛は吹えても、心は吹えぬ秋の嵯峨野に、露分けて降の嵐か、松風か、尋ねる人の、琴の音か、駒引き止めて、立ち寄れば、爪音高き、想夫恋」注：「」のなかの歌詞は黒田節の節で、歌います。

日本開明期のフランス学派の泰斗中江兆民は三味線や義太夫に傾倒していた気持ちはわかるような気がする今日この頃です。

小唄の世界を楽しむ

本郷 公基

十年余り小唄を続けてきて最近やつとその面白味がわかるようになった気がしています。睡眠前に洋楽でだけなく邦楽も聴くようになり、小唄の節回しや哀調にええいわれぬ味があることを感じるようになりました。

最近小唄・端唄の歌詞に興味を持つようになっています。例えば「牽牛花」という小唄は

「ほのほのと 狩野山衆が絵襖に 開く間垣の牽牛花 真白き花は 清らかに ぬれて恥じらう早乙女の まだ口紅のあとだけなやま ばり 仇めく 藍の香に 朝露宿す 葉隠れは 江戸にゆかりの こむらさき」

と言う歌詞ですが、京都狩野派の祖「山衆」が描いた朝顔と早乙女の襖絵を想像しながらのほのほのと歌います。残念ながらこの絵が何処にあるかわかりません。

また今お稽古をしている「鳥辺山」という曲は「一人来て、二人連れ立つ極楽の、清水寺の鐘の声遠く聞こゆる三味線は、茶屋の山衆が色酒に、乱れて遊ぶ祇園町」わしはそなたを色里へ沈めておくがいたらししく初御見の、その夜から心に決めて解いた帯今日の旅装、徒然に鴨の流れや寝枕今は名残の鳥辺の山へ鐘もろともに、露と消えゆく」と歌いますが、地歌「鳥辺山心中」を端唄にしたものですが、恥ずかしながら鳥辺山が何処にあるのか知らなかったもので、先日京都へ帰郷したとき高校の同級生たちと西大谷の墓地を通つて清水寺まで鳥辺野を散策しました。清水の舞台から逆に紅葉した鳥辺山を見て死に旅立つ二人の心境がわかるような気がしました。

翌日久しぶりに嵯峨野を散策していたら同級生の女性がこの辺に小督局の墓があつた筈と言ひ出しました。「平家物語の想夫恋の話よ」と言うので思わず口ずさんだ小唄が次の「槍さび(黒田節入り)」です。

「笛は吹えても、心は吹えぬ秋の嵯峨野に、露分けて降の嵐か、松風か、尋ねる人の、琴の音か、駒引き止めて、立ち寄れば、爪音高き、想夫恋」注：「」のなかの歌詞は黒田節の節で、歌います。

日本開明期のフランス学派の泰斗中江兆民は三味線や義太夫に傾倒していた気持ちはわかるような気がする今日この頃です。

落語の魅力

デイブ 川崎

私は普段、有線放送の演芸中継番組「演芸かわら版」のディレクターを担当しておりますが折角ですから、職業柄知り得た情報をもとに、皆様をちよっとお誘いしてみようかと思ひます。

当番組は、歴史的な大名人とは違った、若手や個性的な嘶家さんを中心とした「他の番組で聴けないようなおもしろい人々」に出ているのですが、中から、私の好みもチョッと混ぜて、何人か「この名前を見かけたら多少速くても出かけて損がない」という方をご紹介したいと思ひます。さらに、もうちよっと絞り込むために「声」でえらんでもみたいと思ひます。

嘶家さんの声にも千差万別ありまして、五街道雲助さんのような太くて低い、地響きするような声から、初音家左橋さんのような軽くて高く乾いた声まで、人それぞれです。

また、声が高い方の代表にあげた初音家左橋さんは、その声の高さをカバーするために、義太夫をお稽古されたとききます。そのため、ここ数年、声にグツと深みが増して

で、ぜひお聞きいただきたいと思ひます。

きたと評判。「夢金」という嘶の冒頭で、金に欲ばりな船頭が「百両欲しい」と大声で寝言を言うシーンがありまして、これはききものです。

現在、奇数月の第二火曜日に川崎市役所隣の「川崎かうひい寄席」で約二十年来にわたってレギュラー出演されています。さて、声の魅力といえは現在若手から中堅に差し掛かろうとしている柳亭市馬さんは絶品です。もともと太いパリのトンの甘い声の魅力なのですが、相撲甚句が好きで節もよいと評判。吝嗇な味噌屋の旦那が留守をしているうちに番頭以下全員がこっそり宴会で盛り上がりつつあるという「味噌蔵」では、途中「磯節」の名調子をお聴きいただくことができます。磯節はもと常陸海岸の糟漕ぎ唄だそうですが、江戸のお座敷でも随分はやったようで、この嘶の途中に必ず登場します。ただ、多くの演者さんは掛け声の部分までしか演じないのですが、市馬さんはひと節まるまる唄いきることがあるようです。

このへんはその日の割り当て時間によって差があるようです。また、同じく冬の嘶の定番「掛け取り」では、歳末の取り立てを迎え撃つ貧乏な職人夫妻が、相撲好きの取り立てに相撲甚句仕立ての言い訳で気持ちよく帰してしまおうというシーンがききもの。実はこの嘶、相撲甚句を取り入れているのは現在市馬さんだけ

ですヨ。さあ、あげればキリがなくなつてきました。このあたり

と評判なのが鈴々舎馬櫻さんと馬櫻さんは古い嘶、失われた演じ方などの発掘にも力を入れていらっしゃる方が、町の稽古屋さん、つまり清元から舞踊までなんでも指南するといひ、昔よくあった「五目のお師匠さん」が出てくる「稽古屋」といひ嘶で、長いこと演じ手のいなかつた後半部を復活させ、そこに出てくる上方唄の一節が、なかなか笑わせてくれます。何の唄なのかちよっと失念したのですが、甚だしく覚えの悪い新弟子に「高い声のお稽古のために」と教える節が「煙が見える」といひ部分であら、唄として出てくるわけではないのですが、興味あり、です。鈴々舎馬櫻さんは、昔ながらの裏声を喋り声にしている方で、その声は華やかな色香があります。その香りの強さが好みでない、といひ方もいらつしやるんですけど、私はぜひおすすすめしたいと思ひます。馬櫻さんは近年、落語協会の若手お囃子方の太田そのさんと組んで音曲の入る嘶の上演に熱をいれておられます。もしも馬櫻さんの「二階ぞめき」に出会つたら大当たり。吉原好きの本店の俵が、家の二階に吉原をそっくりそのまま作らせて、そこで一人遊ぶ、といひなんとも愉快痛快な嘶です。また、馬櫻さんは夏には怪談をお演りになるのですが、その後には必ず恒例として「奴さん」をアンコ入りで踊つて華やかにめます。このアンコは見物

の情報は当番組もこのあたりから、大手書店や演芸場でも入手できる月間情報誌「東京かわら版」で確実に捕まえることができます。ぜひご利用ください。

現在演じられている古典落語のほとんどは、明治になつてから江戸小話をもとに組み立てられたもので、そのため明治の事物が多く含まれたものもあります。古典落語、といひ言葉は、昭和二十二年に久保田太郎がNHKの放送用に生み出した言葉なのだ、といひ事を元TBSの名アナウンサー・川戸貞吉さんから伺いましたが、それはまさに万太郎が、はるか江戸への想いを都風流の歌詞に託したのと同じ頃。古典落語もまた、小唄同様、江戸を舞台に、江戸の思い出に遊ぶ芸として後世に伝えられていつたのでしよう。また、落語は大衆の演芸として現代をも巧に取り入れてゆかなければなりません。

昨年、テレビでもお馴染みの三笑亭夢丸さんが「江戸を舞台にした新作落語を」といひお題で日本中から台本を募集し、三作を買い上げられました。この春には三作を高座にかけ、将来の古典となるよう、ご自分以外の方にも上演権を開放されました。この中の一作「小桜」では、登場人物にちなんで櫻に関する唄が効果的に使われており、一聴の価あり、です。

今(後)の予定

- 八月二十一日(水) 七時-九時 ワード資生堂(銀座資生堂ビル9F) サクセスフルエイジング講座
- 九月八日(日) 一時-八時 六本木花ごよみ和室 第二十四回美紗の会おさらい会
- 九月二十六日(木) 二十七日(金) 七時-九時 四谷コア石響

秋の夜長想いの文を唄に託して「待つ風ばかり残らるる」

- 十一月三日(日) 二時-四時 鎌倉腰越字習センター 邦楽鑑賞会「江戸のブルースを聞く」
- 十一月九日(土) 中野シルクラブ 秋を着る-粋な唄と嘶あれこれ
- 十一月十六日(土) 六時-八時 徳島市武家屋敷原田邸
- 十一月十七日(日) 七時-九時 高松市ニコニコ茶房 秋の風に江戸の香りをのせて唄とおしゃべり

西松布唄の富本節・西橋建の文弥人形「松風」をメイロンに田中優子先生の解説で。十月二十三日(水) 名古屋セントラルタワー3F 六羽翹 二時-五時半 松岡正剛氏と唄をまじえてのトーク

編集後記

皆さん、猛暑の中、いかがお過ごしですか！ 九月のおさらい会まで、あと一ヶ月。出演者の方々は、暑さの中、冷汗、脂汗を流しながらお稽古にはげんでいる様です？(私も) 本格的な暑さはこれから！ 夏バテしない様元気に夏を乗り切りましょう。 大久保